のである。台湾における民主化の深度を示す出来事といえよう。同書の自序からは、著者が一九九五年には立法委員（日本の国会議員に相当）選挙に出馬したことが知られる。

『抗戦時期重慶的対外交往』には、次のように述べられている。「一九三七年十一月、国民党中央党部と国民政府軍事委員会が改組されて〔国民党〕中央宣伝部副部長の董顕光が対外宣伝工作をとりしきり、曾虚白が宣伝処長となった。のち国民政府とともに重慶に移った。〔中略〕国際宣伝処は重慶の本部のほか、上海と香港に支部を設立し昆明には事務所を設立した。さらにアメリカのニューヨークとシカゴとワシントン、イギリスのロンドン、カナダのモントリオール、オーストラリアのシドニー、メキシコシティー、またインドとシンガポールに事務所を設立した」。

このほか『抗戦時期重慶的対外交往』には、国際宣伝処の本部、支部、事務所がそれぞれに刊行物を出し通信社を設立したこと、国際宣伝処は蔣介石に直属して各地の党機関と政府機関を管轄して活動したこと、一九四〇年には国際宣伝処がロンドンでティンパーリーの著作を「公開発行」したことなどが、詳しく叙述されている。

中央宣伝部副部長の董顕光はアメリカ留学の経歴をもつ人物である。ミズリー大学を卒業してコロンビア大学大学院に学び、米国の各新聞の記者を経て帰国したあと英字新聞各社の編集に携わっていた。董顕光はアメリカ留学以前に僅かな期間ではあるが、いわゆる旧制中学時代

の蔣介石の英語教師を勤め、蔣介石との間に奇縁を持つ人物である。戦後は台湾に移り、中華民国の日本大使を勤めた。著書に、董顕光『蔣介石』（日本語版、日本外政学会、一九五五年）があり、董顕光の略歴は同書の著者紹介に基づく。

国際宣伝処長の曾虚白は、『中華民国当代名人録』（台湾中華書局、民国六十七年〔一九七八年〕）によれば、上海の St. John 大学を卒業して『美善雑誌』を刊行するかたわら、南京の金陵女子大学教授を勤めた文学者である。戦後は台湾にわたり中央通信社社長を勤め、政治大学で新聞（ニュース）学講座を担当した。編著に『中国新聞史』がある。

国際宣伝処の組織と活動内容は、『中国国民党新聞政策之研究』により、更に具体的となる。王凌霄は、数年前以来公開が実現した国民党の内部資料と、対外宣伝の責任者であった董顕光や曾虚白の著述に依拠して次のように言う。「国際宣伝処の組織は簡単なものであり、六科四室があった。英文編纂科、外事科、対敵科、撮影科、放送科、総務科、さらに秘書室、新聞検査室、資料室、日本研究室である」。

そして「南京事件」に関しては、次のように述べる。「日本軍の南京大虐殺の悪行が世界を震撼させた時、国際宣伝処は直ちに当時南京にいた英国のマンチェスター・ガーディアンの記者のティンパーリー〔田伯烈〕とアメリカの教授のスマイス〔史邁士〕に宣伝刊行物の《日軍暴行紀実》と《南京戦禍写真》を書いて貰い、この両書は一躍有名になったという。このよう

に中国人自身は顔を出さずに手当てを支払う等の方法で、『我が抗戦の真相と政策を理解する国際友人に我々の代言人となってもらう』という曲線的宣伝手法は、国際宣伝処が戦時最も常用した技巧の一つであり効果が著しかった」。

文中の『　』内は、王凌霄が曾虚白の『自伝』の文章を引用する部分である。曾虚白の『自伝』についてはこのあと述べるが、王凌霄が文中の田伯烈と史邁士に英文名未詳という注を付しているのは「南京事件」に不案内であることを示す。『日軍暴行紀実』とはいうまでもなくティンパーリーの *WHAT WAR MEANS* である。史邁士の『南京戦禍写真』とはすでに述べた『スマイス報告』であり、南京市内の人的被害を過少に（殺害―二四〇〇人）推算しているとして、この点を「虐殺派」からは疑問視されている。

【国際宣伝処の生き証人】

このあと筆者は、極めつけの史料として台湾の友人がもたらした曾虚白の『自伝』を入手した。一九八八年に台北で出版された（上）、（中）、（下）の三冊からなる『曾虚白自伝』（聯經出版事業公司）であり、（上）冊には日中戦争中の国際宣伝処の活動内容が赤裸々に記述されている。王凌霄『中国国民党新聞政策之研究』によれば、曾虚白は蔣介石に委任され、日中戦争開始以前から上海で外信の検閲に従事していた。一九二四年に広州で創立され二七年に南京に

移転したあと活動を拡大していた国民党直轄の中央通信社は、すでに一九三一年の時点でロイターやUPなど外国通信社の手中にあった中国国内へのニュース発行権を回収していた。曾虚白は上海で、好ましくない外信が国内に流れぬよう検閲していたのである。

曾虚白『自伝』は国際宣伝処の成立から説き起こし、日本軍の南京占領直後の状況を次のようにいう。「我々が検討した結果、戦局が全面的劣勢に陥った現段階で明らかにすべき最も重要な事柄は、第一には戦闘にたずさわる将士たちの勇敢に敵を倒す忠誠な事蹟であり、第二には人民に危害を加える人道にもとる凶悪な敵の暴行であった。物事は信じ難いほど都合よくいくもので、我々が宣伝工作上の重要事項として敵の暴行〔の事例〕を捜し集めようと決定したとき、敵のほうが直ちにこれに応じ事実を提供してくれた」。

曾虚白は、日本軍の南京攻略時に東京日日新聞が伝えた「百人斬り競争」の報道と、日本軍は「怒濤のごとく南京城内に殺到した」という読売新聞の掲げた見出しに飛びついた。いうまでもなく「百人斬り競争」とは、二人の日本軍士官が上海から南京に向かう戦闘に際して、日本刀による敵兵の殺害数を競ったという三回にわたる（一九三七年十一月三十日、十二月六日、十二月十三日）戦地からの報道記事である。これらの記事の十二月六日分および十二月十三日分が当時の東京で発行されていたアメリカ人経営の英字紙である *Japan Advertiser* に転載され、さらにこの転載記事がティンパーリーにより *WHAT WAR MEANS* に付録として収録

される。そして二人の日本軍士官は戦後の南京での裁判で、東京日日新聞のこの記事が唯一の証拠となりC級戦犯として死刑に処せられる。記事の原文は洞富雄編『国際軍事裁判関係資料編』に収録されているが、東京日日新聞の伝えた「百人斬り競争」では、斬殺の対象は戦闘中の中国軍兵士であり、飽くまでも武勇伝として紹介されていた。しかし *Japan Advertiser* に転載されるさいの翻訳では、in individual sword combat（剣による個々の戦闘において）と記述されたにもかかわらず、斬殺の対象が hundred Chinese（百人の中国人）と記述され、さらに *WHAT WAR MEANS* に収録されるさいには Murder Race（殺人競争）という表題がつけられ、いかにも戦闘以外での殺人を伴う戦争犯罪であるという装いがなされた。この間の経緯は *WHAT WAR MEANS* に収録される翻訳記事の英語原文と、翻訳記事に付された解説文を注意して読めば、理解される。この戦争報道記事と二人の日本人士官の行為の真偽については、鈴木明氏の『「南京大虐殺」のまぼろし』以来、夥しい議論がある。二〇〇一年五月十二日付の産経新聞に載ったワシントンからの古森義久記者のレポートによれば、日系アメリカ人でカナダのヨーク大学教授であるボブ・ワカバヤシ氏が、日本国内での議論を踏まえた詳細な論文を学術誌に発表した。そして、「百人斬り競争」は虚構の産物であり、二人の日本人将校は不当に処刑されたと結論づけている。

ともあれ、戦意高揚を狙って報道されたはずの武勇談が、敵を非難する戦時宣伝の材料とし